

「大月みらい協議会 取り組み成果発表会」 報 告 書



日 時 平成31年2月20日（水）

午後6時から午後8時まで

場 所 大月短期大学 2階岩殿ホール

主 催 大月みらい協議会

（大月市人口問題・地域活性化を考える市民会議）

【当日プログラム】

- 1 主催者あいさつ（志村 淳 議長）
- 2 来賓あいさつ（石井大月市長）
- 3 大月みらい協議会の取り組み成果発表について
（チャレンジ事業の発表）
進行：佐藤 茂幸 副議長

【導入】大月みらい協議会が示すふるさと教育について
発表者：小俣 理美 委員

【チャレンジA】 事業テーマ：職場体験
発表者：小笠原 則雄 委員

【チャレンジB】 事業テーマ：夢塾
発表者：三木 範之 委員

【チャレンジC】 事業テーマ：学童クラブ
発表者：志村 淳 議長

【チャレンジD】 事業テーマ：情報発信
発表者：中島 啓介 委員

【意見交換・まとめ】 佐藤 茂幸 副議長

- 4 講評（小泉教育長）

1. 主催者あいさつ（志村 淳 議長）

大月みらい協議会の議長を務めさせて頂いております志村でございます。本日はお忙しい中、「大月みらい協議会 取り組み成果発表会」にご参加頂きありがとうございます。

まず、私達の「大月みらい協議会とは何なのか」というご説明をさせて頂きます。ご承知のように、日本全体で人口の減少が進んでおります。もちろん大月市も同じ状況でございます。そのような中で、人口減少に歯止めをかける為、大月市では、

「大月市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定して、様々な施策をする中で、2040年の人口を1万9千人に維持しようという目標を設定しました。その中で、課題をクリアしていくためには、行政だけでなく市民の力も必要ということで、私達みらい協議会の役目は、その一端を担うということで考えて頂ければと思います。

大月みらい協議会は「愛称」でございます。正式名称は、「大月市人口問題・地域活性化を考える市民会議」と言います。名前が長いので、「大月みらい協議会」という愛称を付けることとしました。

大月みらい協議会は、平成26年12月に発足され、現在は2期目で、21名のメンバーで構成されております。副議長は、大月短期大学の佐藤茂幸教授が務めて頂いております。

今日の取り組み成果発表会は、2期目の始めである平成29年4月に、石井市長さんから、大月みらい協議会に、「ふるさと教育について考えて頂きたい」という宿題を頂きました。以来今日まで2年間、その宿題を頂いた中で頑張っまいりました。今日、石井市長さん、石井副市長さん、小泉教育長さん、そして関係各位の皆さん、また、今日のためにご参加頂いた皆様方に報告をしたいと思っております。

今日の発表が、これからの大月市の課題に対しまして、少しでも一助になれば幸い、あるいは望むところでございます。誠に簡単ではございますが、あいさつに代えさせて頂きます。今日はよろしくお願い申し上げます。



2. 来賓あいさつ (石井大月市長)

皆さん、こんばんは。来賓というお話がございましたが、私は来賓と思っておりません。今日は1人の市民として、参加させて頂きたいと思えます。

本日ここに、多くの皆様方のご参加をいただき、「大月みらい協議会取り組み成果発表会」の開催にあたりまして、私自身も大変うれしく思いますし、喜びに堪えない状況でございます。本日、この発表会を主催します大月みらい協議会の皆様方には、協議会活動につきまして、日頃よりひとかたならぬ大変なご尽力、支援を頂いておりまして、本当に頭が下がる思いであります。感謝してもしきれない、そんな思いであります。

この大月みらい協議会でございますが、大月市の人口問題及び地域活性化についての幅広い視野からの意見を求めながら対策について検討するために、平成27年1月に設立致しまして、4年が経過しております。また、これまでも多くの提言を頂きながら、「大月市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定や評価検証などに携わってまいりました。

特に、平成29年4月から、第2期の現在の委員の皆様には、「官民が一体となったふるさと教育を大きく育て上げるようなあり方」について審議をいただく中で、2年間の協議・検討と試行的に実施する実践事業による検証作業を行い、12回に及ぶ協議会全体での会議と、その他にもグループに分かれての個別会議や打ち合わせ、実践事業など数えられないほどの回数の協議を重ねて頂き、この発表に至ったということとなり、協議会の活動に深甚なる敬意と感謝を表すところであります。ありがとうございました。ご苦勞様でございます。

大月市では、平成30年3月に新総合計画「大月市第7次総合計画」を策定し、市民と行政が互いに情報を共有して「信頼と協働」を構築することが重要であることから、その「基本理念」を第6次総合計画から引き続き、「信頼と協働のまちづくり」とし、新たな「まちづくりの将来像」を「ひとと自然をいかし、希望のもてる未来をみんなで実現していくまち大月」と定め、この将来像の実現に向け、市民と行政とが一体となった市政の推進に努めておりますが、まさに、この大月みらい協議会の活動が、協働の形であるものと考えます。市民から起こるこの大月みらい協議会の「協働の活動」の形により、市民と行政がお互いに協力し合うこと、また、この協力によってお互いの信頼を積み重ね、育むことが「地域の活力」につながるものと考えます。

このような市民による活動、「まちづくり」の活動、「福祉」に関する活動、今回の「教育」の活動等、様々な分野で、様々な主体によって、様々な場所で、積極的な活動をして頂くことが、総合計画の理念とする「信頼と協働のまちづくり」であり、また、総合計画の「まちづくりの将来像」とする「未来をみんなで実現していくまち」の実現に向かう市民と行政とが一体となって進めるまちづくりではないかと考えております。



今後においても、大月みらい協議会の大月市発展のための取組みに多いに期待を寄せております。また、私も出来る限りに力添えをしていきたいと思っております。また、大月市におきましては、今回の大月みらい協議会の報告を市政に最大限に生かせるように努めてまいりたいと考えております。

最後になりますが、今回のこの発表会を契機として、大月市における市民主体の協働の活動がさらに活発に進んでまいりますように、また、ご臨席の皆様方には、大月市の活性化に当りまして、より一層のご尽力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆さまの益々のご活躍をご祈念申し上げます、挨拶とさせていただきます。

3. 大月みらい協議会の取り組み成果発表について(チャレンジ事業の発表)



(進行：佐藤 茂幸 副議長)

改めまして、皆さんこんばんは。大月短期大学の佐藤です。ここからは、パネルディスカッションということで、私の方で進行をさせていただきます。しばしの間、お付き合いの程よろしくお願い致します。既にパネリストの方が準備をしておりますが、みらい協議会の成果をそれぞれの視点から発表をして頂こうかと思います。

先程、志村議長からご挨拶がありました。このみらい協議会においては、この2年間のテーマとして、「ふるさと教育」というお題を市長から頂きまして、いろいろな議論をしてまいりました。試行錯誤、紆余曲折しながら、何か一つの成果を見出すことが出来たかなと思っております。まずは、その辺の経緯を、みらい協議会の委員であります小俣理美委員の方から、大月みらい協議会が示すふるさと教育について、この2年間の活動の経緯をご発表頂こうかと思いますので、よろしくお願い致します。

(1)【導入】大月みらい協議会が示すふるさと教育について

(発表者：小俣 理美 委員)

皆様こんばんは。大月みらい協議会の小俣です。よろしくお願ひ致します。私の方からは、はじめに、発表の導入部分として、『大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」について』と題した、平成29年4月からの大月みらい協議会の取り組み内容について、お話しさせていただきます。



平成29年4月に、大月みらい協議会の第2期がスタート致しました。そこで、先程志村議長よりお話しがありましたように、市長より、「大月市のふるさと教育について考えて頂きたい。」という宿題を頂きました。それを受けて、私達はどのように取り組んでいこうかという取組みの方針を固めました。

平成29年度については、ふるさと教育を考えるに当たり、教育現場や地域の現状、課題を抽出する必要があるということから、その課題を抽出して、ふるさと教育についての提言と、具体的な内容の検討を行っていきましょうということとなりました。平成29年度は考えることだけを中心に行いました。

平成30年度では、ただ、提言を言いつけだけではなく、提言の裏付けとなるチャレンジ事業、お試し事業を計画し、それを実施し、検証し、最終の報告書を作成しようということとなりました。ここでアクションを起こしましょうということとなりました。以上のことを、大月みらい協議会の取組み方針として決めました。

まず、平成29年度の取組み内容についてお話しします。平成29年度は全て会議でした。1回の会議で2時間、ときには2時間を超えることもありましたが、全部で7回会議を行いました。会議では、私達は大月市のふるさと教育に対して、「大月市が抱える課題・問題」を出し合いました。これについては、多くの委員が日頃から考えていることなど、多くの意見が出ました。多くの意見が出たので、取りまとめるために、3つのグループに分かれて問題テーマとその解決策のアイデアを示した「問題特定シート」をグループで作成しました。3つのグループからの意見を取りまとめた結果、問題テーマを7つに取りまとめました。このテーマについて、教育委員会に提出して、意見を聞いてみようということとなりました。

7つの問題テーマは、もしかしたら違うという意見があるかもしれませんが、私達が考えた意見です。「①学力に格差がある」、「②ふるさと教育とは何か?」、「③大月市には世界にはばたくための教育がない」、「④大月を知らない、知ろうとしていない、知っているようで知らない、市民にあきらめムードがある」、「⑤地域を知らない大月市民が多い」、「⑥学校では先生が忙しく、家庭では親御さんが忙しい」、「⑦子ども達が考える大月市って何だろうか?」という内容でした。この問題テーマには、解決策のアイデアがありましたが、

今回は時間も限られていますので、説明は省略させていただきます。

問題特定シートを教育委員会に提出しました。そうしましたら、小泉教育長が、みらい協議会の会議にお越しくださいました。そこで、小泉教育長から、大月みらい協議会が提出した問題特定シートについての検討結果と、ふるさと教育についてのお考えをお聞きしました。

小泉教育長と意見交換を行う中で、小泉教育長は、大月みらい協議会に期待する部分として、「学校・家庭の支援」、「キャリア教育の推進」、「カッコいい大人を見せる」という3つのキーワードを私達に挙げて頂きました。この教育長の3つのキーワードを踏まえ、これまでの議論の中から、大月みらい協議会としての検討課題の絞り込みを行いました。これは大変難しい作業でした。委員の皆さんから出た意見について、議事録を読み返して見ていたところ、意見の中に、皆さん共通している考えと言葉がありました。それは「夢」という言葉です。

それは、(下図の) 相関図のような形となっていました。周りの緑の言葉は委員の意見です。ブルーの雲の部分が大月みらい協議会のキーワード、真ん中の太陽が「夢」です。



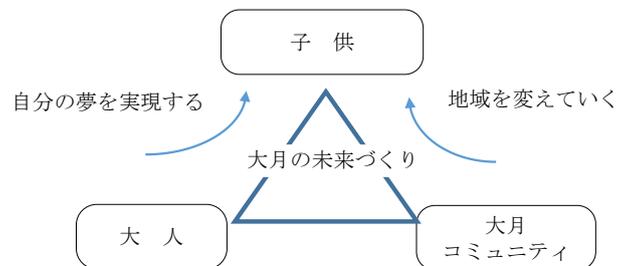
その後、「夢」という言葉から、大月みらい協議会が捉える、ふるさと教育の方向性を一つにし、「大月みらい協議会が示すふるさと教育の理念とビジョン」を設定しました。

【大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念】

「大月ふるさと教育」とは、「大月の未来を創る人」づくりそのものを指す。

具体的には次の2つのビジョンを実現する教育のことである。

1. “子供”の前で「夢を語る“大人”」をつくる。
2. “子供”が抱く「夢を応援する“大月コミュニティ”（＝小さな拠点）」をつくる。



【大月みらい協議会が示す「ふるさと教育」の理念】として、「大月ふるさと教育」とは、「大月の未来を創る人」づくりそのものを指す。具体的には次の2つのビジョンを実現する教育のことである。

1. 子供の前で「夢を語る大人」をつくる。

これは、私達も含めて、子どもの前で大月にはこんな未来があるという夢を語れる大人を創るということです。

2. 子供が抱く「夢を応援する大月コミュニティ（＝小さな拠点）」をつくる。

これは、子どもに夢を語り、子どもにも夢を持ってもらうのですが、夢を持つだけでは駄目で、夢を実現できるようなベースを作りましょうということです。大人を創ることと、コミュニティは、全て子供の夢に向けます。

この図には主体が3つあります。一番上の「大月の子供達」、左側に「大人」、右側に「地域のコミュニティ」です。子供に対して、まず大人が夢を語ります。そして、子供の夢を地域ぐるみで応援するという体制づくり。これを図式化したものです。大月みらい協議会はふるさと教育に対して、このような方向を向いているということで意見が一致しました。

最後となりますが、『大月みらい協議会が示すふるさと教育の理念とビジョン』を設定した後、私達は、これに基づいて具体的な実践案を検討致しました。チャレンジ事業です。4つのチャレンジ事業を選定しました。そして、平成30年度から、このチャレンジ事業を実施していくこととなりました。このチャレンジ事業の内容については、これから各グループの代表の皆様が発表致します。会場の皆様、ご期待をもってお聞き願えればと思います。「大月みらい協議会が示すふるさと教育について」の私の説明は以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。

【佐藤 茂幸 副議長】

小俣委員からご発表頂きました。1年目の活動は、みらい協議会としての「ふるさと教育の理念」をつくるということでした。

ふるさと教育と言っても、いろいろな考え方があります。いろいろな意見が委員の中から出て来ました。それを何とか理念に落とし込むことが出来ました。

1つ言うと、「子どもが大月に夢を抱くことが出来ない。」これは、やはりふるさと教育の大きな課題であったのだろうという認識に立ちました。夢を持てる子どもがいないということは、その前に、「夢を語れる大人がいない」ということです。ここに大きな問題があるのではないかとということで意見がまとまりました。

そして、「夢を語れる大人」がいたら、子どもが触発されて、夢を実現したいと思うようになります。ただ、夢を実現したいと思っても、「夢を実現するための大月のサポート、支援、地域の後押しがない。」したがって、理念の2つ目として、「夢を実現するための大月コミュニティをつくっていこう。」というところにたどり着きました。

さて、「この理念を実現するためには何が必要か？」ということで、私達は2年目の平成30年度の活動として、4つの「チャレンジ事業」を始めました。この4つのチャレンジ事業については、グループに分かれて行いましたが、それぞれ代表を決めて頂きまして、今日発表させて頂こうかと思っています。4名のパネリストから4つのチャレンジ事業について発表して頂いて、その後会場の方からご意見を頂くという流れで進めていきたいと思えます。それでは、チャレンジAについて、みらい協議会委員の小笠原則雄様から発表をお願い致します。



(2) 【チャレンジA】 事業テーマ：職場体験

(発表者：小笠原 則雄 委員)

皆さんこんばんは。大月みらい協議会の小笠原でございます。私の方からは、Aグループのチャレンジ事業について発表致します。

私達のチャレンジ事業は、グループリーダーの白川委員を中心に、8名の委員でチャレンジ事業を行いました。チャレンジ事業の目的・ゴールとしましては、中学校で実施している職場体験を通じて、子ども達に、仕事を通じたカッコいい大人の姿を見せ、夢や希望を持つきっかけづくりを行います。



同時に、子どもと向き合うことにより、受け入れ側となる企業の社会的役割及び従業員の仕事に対する意識の向上を図り、大人自身が夢や希望を持つことの大切さを再認識させることをゴールとして設定しました。また、ここには記載がありませんが、中学生の職場体験を通じて、夢というキーワードをもとに、子ども達と事業所の従業員との夢についての語り合いをきっかけに、子どもだけではなくそこにいる大人にも、気づきや刺激をもらうようなものをねらいとしてスタート致しました。

今回は、時間的な関係で9月にスタートしたことから、大月東中学校を対象としました。実施時期としましては、大月東中学校のスケジュールに沿った形で実施しました。職場体験スタートが9月中旬、職業講話が10月26日、受入事業所の決定が10月下旬、職場体験を11月7日と8日の2日間で行いました。また、10の事業所から、このチャレンジ事業に賛同が得られました。その内、6事業所の方に、10月26日に実施した「職業講話」に参加して頂きました。全体的には以上のような流れとなっています。

それでは、チャレンジ事業の内容について説明致します。まず1つ目として、「みらい夢カード」を作成してそれを学校に掲示してもらうことを行いました。事前に、先生方と意見交換会を行ったのですが、その中で、「ハローワークが出すような求人情報みたいな事業所のプロフィール、職場体験のスケジュール、職場体験の内容、事業所の仕事の内容、PR等が掲載されているカードがあると有難い。それを壁に貼れば、子ども達の事業所に対する興味・関心が高まると思う。」という意見がありました。そうすることで子ども達の仕事のへの興味・関心が高まるということで、チャレンジ事業に賛同する事業所ごとに「みらい夢カード」を作成し、大月東中学校へ情報提供を致しました。

2つ目は、大月東中学校で実施する「職業講話」に参加しました。学校では、職場体験は、事業所へ行く前には、「働くって何？」ということで、先生と生徒達で対話することから始めています。その中の1コマに、何人かの事業所の方に来て頂いて、話しをして頂き、仕事についての意識付けをする『職業講話』を行っています。その『職業講話』に、チャレンジ事業に賛同する事業所の方が参画しました。

3つ目に「職場体験」です。先生方との意見交換会の中で、みらい協議会委員から、「職場体験の中で、夢について子ども達と会話をし、夢を語るような時間を設けるとか、経営者の夢を語るとか、社員の夢を語るということは可能か？」ということを質問したところ、先生方はとても大事なことだという認識であるとの回答がありました。そこで、職場体験を行う事業所で、かつ、チャレンジ事業の趣旨を理解し、賛同して頂ける事業所に、「夢について子ども達と会話をする時間」を設定して頂きました。

1つ目の取り組みである、「みらい夢カード」(下図)の一つを紹介します。これは私のところの会社です。このようなカードを10事業所が作り、事務局が学校へ提出しました。

文字が小さくてすみませんが、PRの欄をご覧ください。その事業所の特徴とPRが写真や絵を入れながら作ってあります。各事業所ではここに様々な工夫をしてカードを作りました。最初に出来た段階で、他の事業所のカードを見比べて、何度か作り直すということがあります。

みらい夢カード 【No. 1】

<p>(事業所名) OHTSUKI 大月精工株式会社</p> <p>(仕事の職種) 製造業 (就業場所) 大月市初狩町中御崎2449-1</p> <p>代表取締役 ①代表者 代表取締役社長 中村 浩</p> <p>②従業員数 90名 (全グループ 800名)</p> <p>③創業・創立 1989年7月4日 (昭和44年)</p> <p>④社訓 夢を形に!</p> <p>事業所の仕事の内容・生産品等 精密機械部品の製造 (大月市) 機械装置の製造 (長野県 岡谷市)</p> <p>事業所の夢 世界で使われる製品を製造する</p> <p>海外拠点 会社 (福岡市) 中国 (蘇州市、東莞市) タイ(アマタ ナコーン) マレーシア(セランゴール)</p> <p>体験内容、体験スケジュール、接客部署等</p> <p>どんな部品をつかって、どんな製品になるのか? 材料 → 加工 → 検査 → 梱装 → 出荷</p> <p>1日目 8:18~12:00 工場見学 12:48~18:00 製品が使えるものかどうか分ける作業(品質管理課)</p> <p>研修課 10:00~10:08 11:00~12:48</p> <p>2日目 8:18~12:00, 12:48~18:00 製造部署で作業 (NC旋盤加工 / 歯車加工) 研修課 10:00~10:08, 12:00~12:48</p>	<p>PR (※自由記入 写真・担当者からのメッセージ等)</p> <p>自分の加工した部品が、いろいろな物に使われていますが、精密な機械や丈夫なロボット(アロボ)に使われているんですよ!と感じます。また、日本や世界の各地の中に自分の作った部品が組み込まれて『様々な人や企業が持っている』と感じてワクワクします。形状がとてもしっかり加工をした部品は、かなり苦勞しますが達成感がある、とても嬉しいです。</p> <p>アイボ aIbO</p> <p>Smart Lock</p> <p>減速機</p> <p>歯車加工</p> <p>旋盤加工</p> <p>樹脂成形</p> <p>転造加工</p>
---	--

先生の話では、みらい夢カードを貼りだした瞬間に生徒達の人だかりとなり、内容を読んだ直後から「俺、〇〇へ行くんだ!」などの積極的な反応が見られたそうです。また、普段接することのない業種についても様子を知ることが出来、仕事の内容について深く考えるきっかけとなっていましたというコメントを頂きました。

2つ目の取り組みを紹介します。10月26日(金)に開催された「職業講話」に、6事業所の方が参加し、生徒の前で講話を行いました。職業講話は授業の5校時、6校時の時間を使って二部構成で行われ、講師が3つの教室に分かれて講話を行いました。講話者は、私のところ(大月精工)の鈴木、サマーヒルズの藤井さん、志仁也の小林さん、セブンイレブン大月鳥沢店の三枝さん、山陽精工の蔦木さん、富浜精工の志村さんの6名です。



職業講話について、学校側からの意見では、「みらい夢カード」において事前に情報があつたことから、生徒達は話の内容に興味を持って臨むことが出来たそうです。さらには、講話者の話の内容が良く、話し方も上手だったので、子ども達は話に引き込まれていたようです。仕事の難しさや地道に努力する姿勢に感銘を受ける生徒や、「情熱がすごい！」と目を輝かせる生徒がいて、職業講話後の授業の中では、生徒達から講話で話された内容に影響された発言が出て来る場面あつたことや、女子の中に製造業、特に技術職について興味を持つ生徒がたくさん見られたようです。

3つ目の取り組みを紹介します。11月7日、8日の2日間で、大月東中学校の職場体験が行われました。そして、その中の賛同事業所には、夢について子ども達と会話する時間を設定して頂きました。なお、賛同事業所には、全部で17名の生徒さんが体験を行いました。

学校側からの意見では、チャレンジ事業に賛同している事業所に行った生徒は、仕事に対するイメージを持つことが出来ていたので、体験での学びが深かったということと、生徒達は生き生きとした表情で職場体験から帰ってきて、自分の将来について深く考えられた子が多く、自分の夢と事業所を結び付けていた生徒もいたというコメントを頂きました。

最後に、Aグループのチャレンジ事業の検証結果を報告します。「みらい夢カード」は、斬新で画期的な取り組みでした。事業所側では、作る過程の中で、試行錯誤を重ねることによって社員が盛り上がっていききました。先程も申し上げましたが、学校側からの意見では、みらい夢カードを貼りだした瞬間に生徒達の人だかりとなり、内容を呼んだ直後から「俺、〇〇の会社へ行くんだ！」などの積極的な反応が見られました。また、普段接することのない業種についても様子を知ることが出来、仕事の内容について深く考えるきっかけとなっていました。

「職業講話」では、子ども達に各事業所の「実情」、「夢」、「仕事に対する姿勢」が伝えられました。それに対して、子ども達は興味や関心を持って話を聞いていました。「みらい夢カード」の事前情報があつたことによる関心の高さもありました。また、講話者に対して複数の生徒の保護者から、「講話が良かった」という話がありました。その場にいなかった保護者から職業講話の話が出るということは、家庭内で子どもとそのような会話があり、保護者が子どもの話に触発されたことを示すものです。学校側からの意見では、「みらい夢カード」において事前に情報があつたことから、生徒達は話の内容に興味を持って臨むことが出来きました。さらには、講話者の話の内容が良く、話し方も上手だったので、子ども達は話に引き込まれていました。仕事の難しさや地道に努力する姿勢に感銘を受ける生徒や、「情熱がすごい！」と目を輝かせる生徒がいました。職業講話後の授業の中では、生徒達から講話で話された内容に影響された発言が出て来る場面あつたことや、先程も申し上げましたが、女子の中に製造業、特に技術職について興味を持つ生徒がたくさん見られました。

「職場体験」では、職業講話の後ということもあり、事業所側はより深く突っ込んだ内容の体験を行うことが出来ました。また、「夢」というものを意識した、従来とは違った体験内容となりました。学校側からの意見では、チャレンジ事業に賛同している事業所に行った生徒は、仕事に対するイメージを持つことが出来ていたので、体験での学びが深かったと思います。また、生徒達は生き生きとした表情で職場体験から帰ってきて、自分の将来について深く考えられた子が多く、自分の夢と事業所を結び付けていた生徒もいました。

最後に、今回のAグループのチャレンジ事業は成功したと思います。事業の順序が非常に良かったことですが要因としてあります。最初に「みらい夢カード」を作って、事業所のPRを行います。その次に「職業講話」を行い、みらい夢カードの内容も含めた話を生徒に分かりやすく伝えました。そして「職場体験」に続く流れが良かったと思いました。この流れは、学校側、生徒と事業所側の双方に意識の高まりが見られた結果となりました。さらに「みらい夢カード」、「職業講話」、「職場体験」の順で実施したことも、子ども達や事業所に、内容や意識を深く掘り下げる良い流れとなりました。従来の職場体験学習に、「夢」というテーマを入れることで、子どもが自分の将来を考え易くなり、同様に受入側となる事業所、我々大人も肩肘張らずに取り組むことが出来ました。

学校側からの意見では、「みらい夢カード」や「職業講話」を含めた事前学習によって、非常に具体的なイメージを持って体験を行い、今までよりはるかに仕事に対する深い学びになっていたと先生方が感じたことや、職業講話の時にも話題に上がっていましたが、身近に知らない仕事や事業所がたくさんあることに気付いた生徒が多く、「大月の事業所がすごい！」という話が出ており、生徒だけでなく、教員も大月を知る良い機会となりました。今後も多くの事業所に参加して頂き事業を継続して欲しいという意見がありました。

みらい協議会の他のメンバーからのコメントとしては、事業所を抱える委員から、「自分も職業講話に参加したかった」という意見や、「こんな素晴らしい取り組みを行っている学校は日本中どこにもないです。頑張って続けて欲しい」という叱咤激励を受けた意見を頂きました。

また、ここで職場体験の担当教諭である大月東中学校の牛山先生が、本日お見えになられておりますので、先生からコメントを頂きたいと思います。

【大月東中学校 牛山教諭】

大月東中学校の学年主任をしている牛山と申します。コメントということでしたが、お礼を兼ねてお話をさせてください。中学生のレベルは、例えば「仕事って何？」と聞いても中々具体的な答えは返ってきません。最初はレジを打っているイメージとかが浮かぶだけでした。でも、例えば「レジがあるスーパーやコンビニではどんな仕事している？」と聞くと、「商品を並べたり、何かを書いています。何かの集計をしています。」と答えます。生徒と話をしているって、やっとなんかそういう話になっていきます。ただ、具体性がないのです。

今回、順番として「みらい夢カード」をお願いした理由としては、そういった子ども達

の実情があったので、それぞれの事業所が一体どのようなお仕事をしているのか、どんな場所でやっているのかという具体性を出すためにお願いをしました。みらい夢カードを貼りだした後、子ども達はすぐに集まって見て、「こういう事業所に行きたい」とか、「大月でこういうものを作っているんだ」ということを話していました。

職場体験では「具体性」が非常に重要かなと思いました。職業講話においても、時間の関係上、30分でお願いしますという無理なお願いをしました。子ども達が集中して聞くことが出来る時間は30分くらいです。そのような中で、講話者はすごく上手にまとめて頂いて、練習をしてきたのではないかなと教員の中でも話がありました。あまりにもお話が上手だったので、先程もお話がありましたが、女子が「あの工場へ行ってみたい」という話がありました。既に職場体験に行く事業所は決まっていたのですが、「先生、事業所を変えられませんか？」と言いにきました。職場体験の事業所には、生徒が1人か2人という条件でお願いしているので、当然変更は無理で、「ごめんね」という話はしましたが、そのくらい子ども達に影響がありました。

また、ここで何よりもお伝えしたいことは、最後のまとめのところで、事業所の方々とお話をしている中で、我々自身も、どういったことを子ども達に考えさせることがよいかということについて具体的になってきました。それは、職場体験に行った事業所で、「その事業所が何を大切にしているのか」、「何に拘っているのか」ということをよく見てきなさいということと、「仕事とは何か？」ということでした。これを考えながら取り組みなさいという話をして子ども達を事業所へ送り出しました。職場体験の終了後、生徒同士のまとめのプレゼンのところで「仕事とは？」というお題を出したところ、ある生徒は、「僕にとって仕事とは人に夢を与えること」と答え、またある生徒は、「仕事とは新しい価値をつくり出すこと」と答えました。また別の生徒は、「仕事というのは、人に喜んでもらうこと」と答えました。最初はお金という感覚でしたが、それがすごく変わってきたなと感じました。また、是非この事業は継続して頂きたいなと思いますので、よろしく願い致します。

【小笠原 則雄 委員】

ありがとうございました。以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。Aグループの発表でした。職場体験というテーマで、一番厚みのある事業でした。

続きまして、Bグループの発表になります。Bグループは「夢塾」というテーマで事業を行って頂きました。三木 範之委員から発表をお願いします。

(3)【チャレンジB】事業テーマ：夢塾

(発表者：三木 範之 委員)

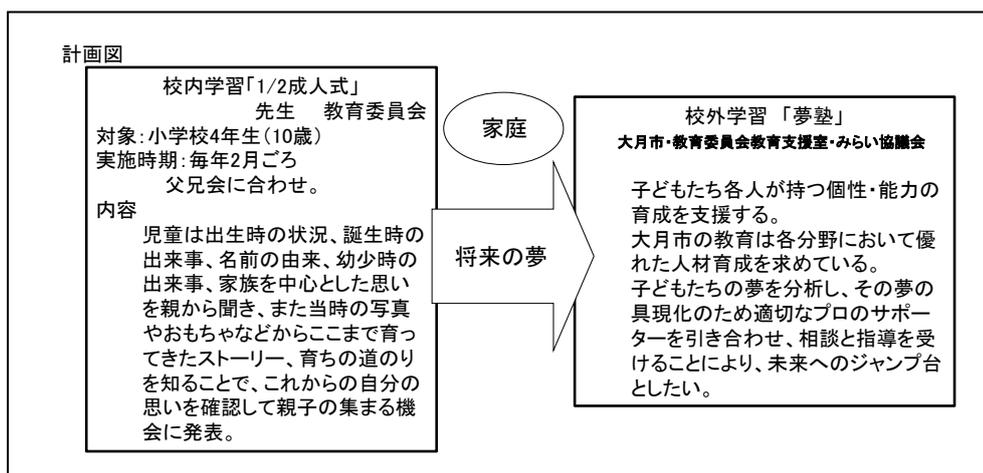
大月みらい協議会の三木です。私からは、Bグループのチャレンジ事業について発表させていただきます。私達のチャレンジ事業は、今日欠席されているグループリーダーの佐々木啓吉委員を中心に、4名の委員で事業を計画しました。このグループ分けは、当初、事業のアウトラインを作られた、佐々木委員さんに賛同する形で他のメンバーが参加することとなりました。佐々木委員が夢塾という概念を出した時に、子ども達が持つ個性的な部分を伸ばしてあげることが出来ないか、そういう部分で私達が協力できる部分があるのではないかと、要するに出る杭をどこまでも引っ張ってあげるといふものでした。教育が良い悪いという話ではなく、自由に可能性を伸ばしてあげることが面白いと考え、その部分に賛同して参加することになりました。実はこの部分が後々大きな問題となります。それについては後で説明をさせていただきます。



チャレンジ事業のゴールとしては、「夢塾」計画を市教育委員会に提出し、吟味して頂き、この計画が実行性のある場合は詳細計画に取り組み、実行性が無いと判断された場合は、計画は終了することとしました。

現在、小学校では「1/2成人式」という行事があります。「1/2成人式」は、大月市で大変長く続けている行事で将来の夢を書いたり、親に感謝の気持ちを伝えるという行事なのですが、この部分での子ども達の夢をピックアップして、夢塾でサポートしようということで進めました。学校では原則全員ということとなっており、夢塾では、子ども達の個々の夢を支援することから始めました。

こちらが計画の概念図（下図）になります。校内学習である「1/2成人式」によって、家族や子ども達の抱いた「将来の夢」を拾い上げ、校外学習である「夢塾」でサポートしてあげようというものです。その夢の具現化のため適切なプロのサポーターを引き合わせようというもので計画致しました。



細かな計画の内容も私達で考えました。「事務局・組織の編成」については、大月市、教育委員会教育支援室、みらい協議会委員で構成して、事務局は大月市の方に協力頂けたらいいだろうという話になりました。「夢塾対象児童」としては、市内小学校の1/2成人式参加児童である小学4年生を対象としました。今年度市内の小学4年生は121名で、その夢を詳細に洗い出しすることは可能であると判断しました。「将来の夢の探索方法」としては、1/2成人式の夢を見させて頂いて、入塾は年度の変わる5年生になった時点で、一部の児童の「君の夢を手伝ってみようか」ということで始めます。可能性としては、1人か2人ということを中心に個人的には考えていました。「将来の夢の採用」については、作文内容をもとに絞り込みを行います。

また、「サポーター講師の選定」として、子どもの夢に合致するサポーター講師の選定が出来ない場合は入塾させないこととしました。これはどういうことかと言いますと、子どもの夢を実現するためにやる以上は、一流の人間に合わせることです。その部分が難しい場合は、こちらの方から入塾出来ないことと、もう1つは、夢の具体性が決まっていて、その夢に向かって進んでいる子どもは入塾できないこととしました。例えば、サッカー選手や野球選手とか、その他稽古事でも、特化されていて、方向性が見えているものに関しては大丈夫だろうということで除外することとしました。そうではなくて、かつてあった夢というものを見させて頂いたときに、「地球の環境を守ることをやりたい」とか、「貧困をなくして子ども達が同じように勉強できるようにしたい」と書いている子どもがいました。そういった場合には、具体的なNPOで活躍している人を紹介するとか、世界的な事例となっている場所に連れていくとか、そういうようなことをやってみようということ、サポーター講師の選定や講師との顔合わせということをやりたいと考えました。

最終的には講師が決まったら、私達がサポートして、最低3回は子ども達と会って頂いて、必要な場合にはセッティングすることを考えました。ただ、卒塾後も指導を受けたい場合は保護者が講師と相談する等、経費的な部分で問題がありましたが、今回は試しに行う部分なので考慮せずに計画として進めました。

最終的な部分として、「夢塾」についての企画を教育委員会に提出し、教育委員会と実現性について協議を行いました。教育委員会の考えとしては、「夢塾計画の理念とした部分にもありましたが「原則全員」、「平等」という考え方から、『夢塾への入塾児童の絞り込みをする』ことについては慎重でなければならない」とのことでした。「原則全員」、「平等」という部分で個人の夢を特化していく夢塾とは相入れないものであって、ここの部分を事業化することが難しくなってきたということがこの話の中身です。

子どもの資質は現場で見る教師以外に見定めることは出来ないだろうということから、私達が計画書を作って教育委員会にお願いするということとしましたが、夢塾に対する市の考え方としては無理があるとのことでした。また、学校の先生はお忙しいということの中で、短い期間で簡単に事業化することは中々難しいということもあって、短い期間でゴールをつくることが出来ませんでした。そのような経緯の中で、今回は見合わせるという

こととなりました。

私達の最終的な検証結果ですが、1番目として、1／2成人式は子どもの夢を保護者と共有する機会であると学校側では捉えている点と、10歳という年齢は夢に対して子ども達に成長の発達度合がそれぞれ違いあり、夢塾の企画・原案とおриには中々取り組んでいくことは難しいという話がありました。

2番目としては、夢塾の子どもの夢を膨らませるということは素晴らしいことですが、1／2成人式の中で、例えば「夢追い人」みたいな方が、学校に来て子どもとふれあって頂くことが出来れば一番いいのではないかと。全般的に夢を追いかけるということをもっとして、与える機会を作った方がいいのではないかとという意見を頂きました。

3番目としては、子どもの夢に向き合う夢の共有者は、本来は保護者であり、ふるさと教育のターゲットは保護者であってほしく、地域の人材が保護者にメッセージを送ってもらいたい、つまり保護者を教育してもらいたいというコメントがありました。ここの部分で、私達は保護者だけでなく外部の人間、本物のプロが関わることがいいのではないかとということがありました。全員原則という部分で難しいという話でした。

4つ目として、現在、学校には発達障害というような課題があり、そのような中で先生方は子ども達を一生懸命サポートしています。その部分は大変重要なことですので、その部分を最優先にしているというご意見を頂きました。

最後に5つ目として、今回の提案で共有出来たことは、「子どもが夢を持つことはとても大事なことなので、夢塾を今後どのような形にしていくのかについては、一緒に考えさせて頂きたいという想いです。」というご意見を頂きました。事業そのものの具体的な部分とは別に、「夢を持たせるためにはどんな方法がよいのか？」ということで、今後、みらい協議会の事業で連携をしていく一つのきっかけとなったということが、事業の検証の中で見つけた結果であります。以上です。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。Bグループの夢塾の発表でした。Bグループは企画まではいきましたが、実際の事業には至らなかったということです。ただ、それはそれで大きな意義がありまして、夢塾の企画は我々の中では評価は高いのですが、時期尚早かなという感じがする発表でありました。

次はCグループの発表になります。学童クラブに関するチャレンジ事業です。志村 淳議長からの発表になります。よろしくお願いします。

(4)【チャレンジC】事業テーマ：学童クラブ

(発表者：志村 淳 議長)

大月みらい協議会の志村淳です。私の方からは、Cグループのチャレンジ事業「放課後学童クラブの取り組み」について発表致します。

私達は、6名の委員でチャレンジ事業を行いました。チャレンジ事業の目的・ゴールとしましては、『学童クラブの子ども達が、放課後の遊びの時間を通じて、「夢を抱き心豊かな成長を」との願いから地域の方々の参画を得て、夢につながる種まきとなる土壌づくりとする。』を目的としました。私たちのグループは、学童クラブの先生方あるいは地域の方と、一から企画を一緒に考えて、「夢」というキーワードを念頭に置いて、試行錯誤しながら事業を進めてまいりました。



チャレンジ事業の対象を学童クラブに限定して、7つのクラブと事業展開していく方策としました。学童クラブは、初狩1・大月2・七保1・猿橋2・富浜1であります。学童クラブは、低学年生のみクラブと全学年を対象としているクラブなどもあります。学童クラブの児童数は、全体で222名おります。小学校全体の児童数が843名ですので、割合とすると約26%となります。4人に1人が学童クラブに在籍している状況であります。なお、実施時期等については、学童クラブの意向を考慮しての調整としました。

それでは、チャレンジ事業の内容について説明致します。まず、学童クラブに特化した理由を申し上げます。大人は、子どもの頃を振り返り、学校だけでなく地域の支えの中で自由な時間や遊びを通して成長してきたという思い出を持っています。昨今では、少子化の折、子ども達の集う機会が地域に乏しいのが現状です。そのような状況から、理由の一つ目として、「学童クラブは学校教育とは別環境、放課後の自由な遊びを通じて、成長する場であること」、二つ目として、「学童クラブが地域の方との関わりを創り出せる場」と考えて、学童クラブを拠点とする事業としました。

そこで、取り組みの一つ目として、「学童クラブとは何なのか?」、「いったい何だい?」ということで、元学童クラブの先生を招いた勉強会や、市役所の所管課からの情報をいただきながら事業の方向性を探りました。

取り組みの二つ目として、「事業実施に伴う各分野との調整方法について」であります。私たちの事業は、大きく分けて、「学童クラブ」、市役所の「福祉課」、そして「地域の方」の参画、この3つの柱により事業が成り立ちますので、それぞれの分野と調整を図りながら今日まで進めてまいりました。

そのような中、まずは、すべての学童クラブに対しまして、意向調査「夢シート」と題して、本チャレンジ事業への賛同を求めました。結果については、ほぼ賛同を得られる内容となりました。回答で「考慮中」という回答もありましたが、それは私たちの説明不足

が要因だと考えました。

取り組みの三つ目に「独自イベントの企画・実践」です。目的で述べましたように、学童クラブの先生、地域の方の参画を得る中で、主に大月の自然をテーマとして、企画の作成にあたりました。時間的な制約の中で、最終的には、3つのクラブと4つの事業を実践しました。それぞれのクラブと企画書を作成して、異なる4つの取り組みを行いました。

いよいよ実戦です。実践①として、富浜地区の学童クラブ「たんぼぼ」さんと「読み聞かせ」を行いました。小学校の夏休みの時間を利用しての実践となりました。読み聞かせは、家族同士のつながりと、関わりをテーマにした「子ギツネこんと子タヌキぼん」の絵本をメインとして、語り手は、



私たちグループCの委員と地元、富浜・梁川地区の方で、主に山梨県寿勸学院のご婦人の方をお願いをしました。語り手の皆さんは、「読み聞かせ」初体験ということもあり、練習を重ねての発表となりました。そして、学童クラブの児童から、数日後に、「読み聞かせ」の場면을絵日記に書いてくれました。

実践②として、猿橋地区の学童クラブ

「ひまわりⅡ」さんと「自然散策」として、猿橋小学校周辺を散策しました。安全を第一に考えて、現地調査を数回行うなど、地域の自治会長、防災会長の協力を得る中で、企画を立てました。柿をもいで食べ、栗拾いをしたり、トマトを食べたり、



クルミを金づちで割って、ほじって食べたり、木に補聴器をあてて音を聞いて、「木が生きている」って騒いだり、妙楽寺さんでは、ご住職さんが「けんちん汁」を振る舞って頂き、お弁当をお寺の中で食べさせていただきました。また、座禅体験では、大人顔負けの立派な座禅で、褒められた場面もありました。

実践③として、猿橋地区の学童クラブ

「ひまわりⅠ」さんと「ひまわり村」と題したイベントを学童の先生方と相談し、企画制作を致しました。ひまわり村は、「おにぎり村」「テント村」「トンネル村」の三つの村があります。「おにぎり村」では、



地域のご婦人が、お米研ぎから、ごはん炊きと、おにぎりづくりを児童に教えて頂きました。「テント村」では、元地域おこし協力隊の鈴木涼平さんから巨大三角テントを借用して、大人、児童の参加者全員で、テント内でおにぎりを

頬ばりました。「トンネル村」では、体育館の中で、段ボールを使っの 30mのトンネルづくり、ギネスに挑戦する意気込みでありました。

その中で、段ボールへのお絵かき、夢書きをしたのですが、それは児童らの発想でありました。トンネルづくりから発展した「僕、私の夢」書きは、まさしくその産物でした。決して「やらせ」ではありません。この会場に、夢を描いた段ボールを持ってきました。その中で、子どもの夢に「天国に行きたい」という夢が書いてありました。私は、これはいい言葉だと思いました。きっと親御さんから、「良いことをすれば天国に行けるんだよ、悪い事をすれば地獄に行くんだよ」という話をしてくれたのかなと思いました。後ほど、ご覧いただければと思います。



実践④として、富浜地区の学童クラブ「たんぽぽ」と、二回目となる「冬のお散歩」と題したイベントを企画しました。当初から、「読み聞かせ」と「バードウォッチング」をしたいとの思いが、学童クラブと私たちのグループにありましたので、今年の1月に実施する運びとなりました。道中は大人と子ども達で手を繋いで行き、バードウォッチングでは双眼鏡を持って行いました。途中の福地八幡神社では、氏子総代の奈良さんから説明を頂きました。また、現地調査をする中で、大月市内にいる鳥を調べて、鳴き声を入れるなどしたオリジナル図鑑を作成し、当日観察できた鳥を参加者の皆さんと確認をする行為を「鳥合わせ」と言いますが、オリジナル図鑑と照らし合わせながら、「鳥合わせ」を行い、おわりの会を行いました。非常に楽しかったです。実践の説明は以上となります。



次に、取り組みの最後となります。「事業実施後のヒアリング調査」であります。私たちのチャレンジ事業を検証する上で、本事業に携わっていただいた方々から聞き取り調査を行いました。具体的には学童クラブの先生、地域の方々を対象とした調査としました。学童クラブの児童については、事業実施の直後に感想をもらっていますので、それを調査結果と致しました。

ヒアリングの調査内容としては、「1 子供たちの反応はどうだったか」、「2 協力者の反応はどうだったか」、「3 子供たちが夢を抱く、きっかけとなったか」、「4 事業実施

に伴って負担を感じたことはなかったか」などのご意見を伺いました。なお、ヒアリング調査の結果としましては、時間の都合上、内容は割愛させていただきます。

以上、ヒアリング調査結果を踏まえまして、最後に、Cグループのチャレンジ事業の検証結果を報告します。

●企画についての検証は、

- 1 学童クラブの先生から、普段とは違った体験子ども達が出来て良かったとの感想を得ています。
- 2 事業のボリュームを考え、気軽に、すぐに取り組み、準備が容易である内容が継続の近道であると感じました。

●地域との連携の検証については、

- 1 「読み聞かせ」は、お話を地域の大人が子供に聞かせること、そのものに意味があったと思う。
- 2 地域の大人と子供でテーマを持ちながらフィールドワークをすることは、学童クラブと地域のつながり深めていくという手応えを感じた。
- 3 事業に関わる方は、その地域の住民であることが大切な条件である。

●その他、事業を振り返っての検証については、

- 1 幼い時にどのような経験を積むかによって、故郷への思いや希望、愛着心が変わってくる。身近な地域の大人たちが、良い経験を提供することは大切なこと。
- 2 1回2回と行った事業が好評を得ることはある意味当然とも言える。学童の子どもたちに「今日は、みらい協議会の日だ」と覚えられて、楽しみにされるようになって、初めて「ふるさとの楽しい思い出の1ページ」を作ることにも貢献したと言える。との厳しい評価もありました。

以上でCグループの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。学童クラブに関わるチャレンジ事業でありました。

それでは最後のDグループの発表になります。夢を叶える大月仕事人として情報発信に関わるチャレンジ事業です。中島啓介委員からの発表になります。よろしくお願ひします。

(5)【チャレンジD】事業テーマ：情報発信

(発表者：中島 啓介 委員)

大月みらい協議会の中島です。Dグループのチャレンジ事業について発表します。私達のチャレンジ事業は、グループリーダーの佐藤茂幸委員を中心に、6名の委員で事業を計画しました。



事業は2019年3月を期限として、目的としては、

- ① ふるさと教育の理念にある「夢を語る大人」として、要件にある「夢を叶える大月仕事人」を先導的に5名発掘する。
- ② これら大月仕事人に大月市広報を通じて夢を語ってもらい、子供や若者を触発し未来を展望する想像性とモチベーションを養ってもらう。
- ③ また、大月の大人たちに対しても、次年度以降の「夢を叶える大月仕事人」になるべく啓発し、世代間の精神的な交流を深める。

ということとし、ゴールとしては、2020年度までに「夢を叶える大月仕事人・100人」を発掘し、多角的に情報発信している状況を作りあげることとしました。

事業概要としては、「夢を叶える大月仕事人」を発掘して、市内に広報することで、大月みらい協議会が考える「ふるさと教育」の理念とビジョンに貢献していく事業とさせて頂きました。

まず、「夢を叶える大月仕事人」とは、大月市に在住または仕事を持っている人で、次の5項目のうち3項目を満たす人と定義をしました。

- ① 自分自身の仕事に対して誇りをもって、「キラキラ活動している人」
- ② 若い世代に対して、地域や社会の明るい未来を堂々と「夢として語れる人」
- ③ 生き方や思考がスマートで「カッコイイ人」
- ④ 仕事・人生・生活様式・趣味・風貌・言動のいずれかにおいて、大月でオンリーワンの「ユニークな人」
- ⑤ 目立たなくとも一つのことをコツコツ極める「職人気質な人」

この5項目のうち3項目を満たす人「大月仕事人」と定義しました。

具体的な事業ですが、おおつき広報の2018年10月号から2019年2月号まで、「夢を叶える大月仕事人」とするコラム記事を掲載させて頂きました。また、紹介記事対象の「大月仕事人」を5名選出致しました。そして、取材班として、地元の高校生・大月短大生で構成される「若者取材班」(2名)を編成し、そのサポートに「みらい協議会」や「秘書広報課」があたって頂きました。記事に関しましては、若者取材班が大月仕事人に個別ヒアリングし、これをインタビュー形式で記事にまとめました。記事掲載後は、各学校での評判や記事活用などの反響をスクリーニングし、大月仕事人が語る「ふるさと教育としての夢の力」を評価する。そして、その活動を通じて、チャレンジDグループの活動を総括し、次年

度以降の継続実施の有無を検証致しました。継続実施の場合は、その事務局体制などを企画する。これを全5回にわたり、大月仕事人を選定し、若者取材班を編成し、大月仕事人の取材を行い、この内容を市広報誌「広報おおつき」に掲載をしました。

夢を叶える大月仕事人としての第1回目は、

山地渉（やまじわたる）さん

【プロフィール】 富浜町在住／大月桃太郎会事務局
／大月アスリートクラブ事務局

【取材の主な内容】：「桃太郎＝幸福への方程式」として、
10余年にわたって大月の桃太郎伝説を広める活動をする山路渉さんに活動や仕事を紹介してもらいました。

【若者取材班】 宮本茉依（みやもとまい）（大月短大生）
高野芽美（たかのめいみ）（大月短大生）



第2回目は、藤井真弓（ふじいまゆみ）さん

【プロフィール】 御太刀在住／サマーヒルズ代表
／一般社団法人メリーの会代表理事

藤井さんはみらい協議会の委員もしております。

【取材の主な内容】：「大月の可能性を伝えたい！」
として、子育て支援活動を主宰し、その支援活動の輪を他の地域へ広げる藤井真弓さんに活動を紹介してもらいました。

【若者取材班】 木下夢実（きのしたゆめみ）（都留高生）
阿竹花菜女（あたけかなめ）（都留高生）



第3回目は、藤本政幸（ふじもとまさゆき）さん

【プロフィール】 大月町真木在住
／大月市観光ボランティア／山梨県自然監視員

【取材の主な内容】：「山に情熱を注ぐ山のスペシャリスト」として、ボランティアで大月の山々をガイドする「山の達人」藤本政幸さんに活動を紹介してもらいました。

【若者取材班】 箕輪瞳（みのわひとみ）（大月短大生）
笹岡好実（ささおかこのみ）（大月短大生）



第4回目は、山崎葉（やまざきよう）さん

【プロフィール】猿橋町藤崎在住／ガラス作家

【取材の主な内容】：「思い」を「仕事」に」として、大月の自然からのインスピレーションを形にする「ガラス作家」の山崎葉さんに活動を紹介してもらいました。

【若者取材班】持田駿（もちだしゅん）（大月短大生）

宮崎滉基（みやざきひろき）（大月短大生）



なお、この時はNHKさんによるこの企画への取材もあり、Dグループの企画に関する取材があり、佐藤グループリーダーが取材に対応をし、この日の夕方の「NEWSかいドキ」でこの模様が放送されました。

第5回目、最終回は、星野喜忠（ほしのよしただ）さん

【プロフィール】大月町花咲在住／国際ロータリー

第2620地区2018-19年度ガバナー／国指定重要

文化財「星野家住宅」当主／富士納豆製造所代表

星野さんは第1期のみらい協議会の議長を務めて頂いた我々の先輩にもあたる方です。

【取材の主な内容】：「大月から世界へ」として、地域活力を自分達で作り出す大切さと、地域に残る歴史と文化を次世代に伝える活動を星野喜忠さんに紹介してもらいました。

【若者取材班】木下夢実（きのしたゆめみ）（都留高生）

阿竹花菜女（あたけかなめ）（都留高生）



最後に検証ですが、まず、1点目に「ふるさと教育の理念にある「夢を語る大人」として、上記要件にある「夢を叶える大月仕事人」を先導的に5名発掘する。」について検証を行いました。その結果、「5名の仕事人を発掘し情報発信ができた。」ということが第一として評価し、「男女のバランス、地域的な網羅性もある程度カバーすることができた。」という点も評価できました。

2点目に「これら大月仕事人に大月市広報を通じて夢を語ってもらい、子供や若者を触発し未来を展望する想像性とモチベーションを養ってもらおう。」についてですが、その評価は、「取材した若者において、刺激的な経験であったと思われる。ただ、残念ながら大月市の広報がどちらかというと大人を対象とした誌面であるので、子ども達へのふるさと教育という面で、発信媒体としては限界がある。」ということでした。

また、「大月の大人たちに対しても、次年度以降の「夢を叶える大月仕事人」になるべくし、

世代間の精神的な交流を深める。」についてですが、その評価は、インタビュー形式の「大月仕事人」の原型を確立できたことは大いに評価できる。今回の先導的な5名の発信を足掛かりに、多くの方に「大月仕事人」なってもらえる可能性が確認できた。

続いて、若者取材班・大月仕事人・大月市広報担当からの「事業を振り返ってのコメント」がありますので発表致しますと、若者取材班からの評価として、取材した若者である当事者が、夢や希望をもって仕事をしている大人がいることの気づきを得ており、この点で当事業の目的を具現化できたと評価できると考えます。

また、夢の実現の仕方においても、「地域に縛られるものではない」などの感想から、ふるさと教育に関わる若者たちの想像性にも貢献できたのではないかと思います。そして、地元で育った高校生については、家族・親戚・知り合いから「記事を見たよ」とする多くの反響があったようであり、地域を学ぶことへのモチベーションの効果も検証できた。ただし、地元外からの来ている大月短大生については、ごく限られた関係者からの反応にとどまりました。出来れば大月出身の若者（子供）が取材をすることの方が、当然のことながら効果があると考えられます。

また、大月仕事人からの評価として、5名の大月仕事人からご意見を頂き、情報発信という事業の意義について大いに評価を頂きました。広報掲載後の反響もご本人たちに対して少なからずあり、情報発信としての効果性も確認できました。これらのことから、大月仕事人としての夢やプライドを明示化させることにおいて、メリットのある事業であったと言えるとのことでした。

最後に、広報担当者からの評価としては、おおつき広報としての企画の有用性において大いに評価を頂いた。ただし、広報媒体だけでは、「ふるさと教育」には十分にいたらないとの厳しいコメントもありました。事業の継続性や、記事の利用方法など今後の課題に関わる指摘があった。というような意見をいただきました。以上で、Dグループのチャレンジ事業について発表を終了します。ご清聴ありがとうございました。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。一通り4つのグループから発表をして頂きました。

(6) パネリストとの意見交換

(進行：佐藤 茂幸 副議長)

ここからは限られた時間になりますが、意見交換会をしていきたいと思っております。意見交換会のやり方としましては、私の方から1つ質問をさせて頂いて、それに補足説明を含めてお話して頂こうかと思っております。その後に、会場からご意見を頂きたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。

当初、2つの質問を用意していたのですが、時間が限られてきていますので、1つだけにさせて頂きます。今、一通りチャレンジ事業の発表をして頂きましたが、この事業はお試し事業です。ただ、これで終わってしまったら意味がないので、来年度どのように繋げていくのかということを含めて、このチャレンジ事業の「課題」を挙げてください。そして、この課題を解決するための対応策みたいなものがあれば発表して頂きたいと思っております。それではAグループからお願い致します。



【Aグループ：小笠原 則雄 委員】

今回のAグループのチャレンジ事業に関わったほとんどの方、学校、賛同事業所、委員から「今後も事業を継続してほしい」という意見が寄せられており、何とか事業を継続したいと考えております。

そのためには、まず、我々の事業に賛同する事業を拡大したいと考えております。大月市内にはたくさんの方の事業所があります。事業に賛同して頂ける事業所を募って、外に広げていきたいと考えています。

2つ目として、今回は時間がなくて大月東中学校だけで実施しましたが、次回は猿橋中学校でもやりたいと思っています。ただ、猿橋中学校は職場体験を行う時期が早いということで、もし動くとしたら、3月くらいから準備を始めなければいけません。

3つ目としては、市民への情報発信についても課題としてあります。

4つ目としては、「みらい夢カード」の拡大です。みらい夢カードをつくることは手間と時間がかかります。本当にこの賛同して頂ける事業所でなければいけないのですが、そのカードの拡大も出来ればと考えております。

最後に、事業が結果的に好評を得ていますので何とか継続したいのですが、事務局をどうするのかという課題があります。事務局についてはこれまでの議論の中で、事業所側で事務局を担うかという話も出ていましたが、現実的に、これだけのことを事業所側で全部担うということは難しいと思っております。出来れば学校と事業所のパイプ役を、市役所関係の方が担って頂きたいと考えます。以上です。



【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございます。課題としては好評な事業なのでもっと拡大をしていきたい。実施する学校の拡大、みらい夢カードをつくって、生徒を受け入れる事業所の拡大というような話をして頂きました。その一方で、事務局をどうするのかという問題もあります。

では、次にBグループの夢塾に関わる課題について発表をお願いします。

【Bグループ：三木範之 委員】

Bグループの事業としては実施できませんでしたが、全体的な反省も含めて、1／2成人式と夢塾の連動が出来なかったことについて、私達に熱い気持ちがあったのですが、大月市の教育現場の状況を調べなかった部分が、大きな齟齬（そご）を生んでしまったのかなと思いました。やはり、教育現場について、現場のスタッフや教育関係者の方と意見交換を行い、よく調べた上で、同じテーブルについて頂くことが必要なことであり、それが課題にもなります。



ただ、1／2成人式というのは学校で長年行われていて、子どもが夢を語る場所があるのですが、その部分をいかに叶えるかということについては、非常にもったいないと思いました。ここをもう一歩先に進ませるような教育現場の体制があればいいなと思いました。あるいはここから先は外に出してあげるような方策を、今後は是非検討して頂きたいと思いました。夢をこれを大月の宝として拾い上げて、実現に向けて、教育委員会だけではなく、一般の方が協力出来るような体制をつくっていくことが出来るかどうかは課題です。以上です。

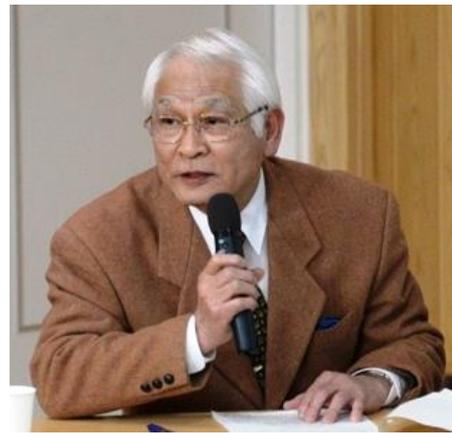
【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございます。結構壮大な企画なので、一步一步前に進められればいいなと個人的には思っております。

それではCグループの学童クラブに関する課題について、志村議長から発表をお願いします。

【Cグループ：志村 淳 議長】

何と言っても一番最初に必要なことは、地域の方々の協力者を見つけることです。これが生命線です。今回は幸せな状況でした。隣近所の皆さんに「お手伝いしてくれる？」、「私で出来るかしら？」、「とんでもない。十分だよ、是非頼むよ」というようなやり取りがあって、快く手伝ってくれました。私はここが一番大事な部分だと思いました。



また、今日はことぶき勸学院の方々もお見えになられています。実は、ことぶき勸学院で学習したことを地域へ還元してみる、やってみるという形ではなかったのかなと思います。そのようなことを考えていくと、これからいろいろな団体等と連携をしていくということの大事さということを感じています。

もう1つは、学童クラブと地域をつなぐパイプ役ということで、先程Aグループの方からも課題として出ていましたが、私達も同じです。この事業は中々、時間と手数が掛かります。出来れば事務局があってくれれば有難いです。事務局があれば、様々な媒体を活用して事業の認知度を高めていくことが出来ると思います。また、細かく発信をすることも出来るのかなと思いました。そのようなことで、「自走する」、「自分達がやっていける形」が見出していけるのかなと思いました。

もう1つは、行政とのタイアップということで、事務局のみならず、他の担当課、私達の事業は、福祉課があるのですが、そのもとに学童クラブがあります。この3つの連携の中でなければ事業が回っていかないということがありまして、勝手に私達が事業を行えばいいというものではないと思っています。信頼の置ける活動を行うためには、市役所の皆さんに関わって頂くことが大事かなと思っています。それには1つ理由があります。私達のグループには「おつけ団子の会」の山口委員がいます。彼の実感なんです。おつけ団子の会は大変な状況にありまして、彼は、「私の反省ですが、市役所の皆さんとタイアップしていくことは、事業を継続していく上では実に大切な事である。自分達だけでやっていると、いつか1人になってしまう寂しさがあつた」と言っておりました。その体験の中から、ある時期までは、一緒にご指導頂きながら、共に手を携えながらいければ有難いなと思っています。

後は、今後事業を継続していくことでいろいろなありますが、模索をしながら、テストをしながら、手探りでやっていかなければいけないと思っております。以上です。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございます。それではDグループの情報発信に関する課題について、中島委員から発表をお願いします。

【Dグループ：中島 啓介 委員】

Dグループでは、今回広報を通して、大月仕事人取材させて頂き、夢を語る大人という部分ではすごく良かったと思います。ただ、それが「ふるさと教育」として、若い世代の皆さんに伝えられるかどうかという部分では、まだ検討の余地があるのではないかと考えられます。



先程も申し上げましたが、より若い世代、高校生とかに今回取材してもらったのですが、中学生とかにもっと広げて、たくさん子ども達に取材をしてもらうということも1つの対応案と思いました。ただ、中学生の場合はインタビュー形式の中でうまく質問をすることが難しいかなと思います。

また、記事にするために、原稿のテープおこしとかも行わなければいけません。記事の形式にするということも大変な作業です。今回は企画財政課にテープおこしをして頂いて、記事の体裁を秘書広報課にお願いをしました。この事業を継続するにあたって、誰がこの業務を行うのかということが正直決まっています。そのような部分も課題ではないかと考えます。

後は、他のグループの皆さんも素晴らしい活動をされている中で、他のグループと連携を取って、大月仕事人の発掘をやっていければと考えます。また、今回は5回の掲載となっていますが、今後継続していければ、大月仕事人も増えて、それを冊子にまとめて、子ども達に情報提供することが出来るのではないかと考えます。

そのような中で、まずは継続する上で、どのようにやっていくのかということが正直決まっていないということが課題です。以上です。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございます。今後のことも含めて、パネリストの方にご説明して頂きました。今回の活動はいろいろな方にご協力頂きながらチャレンジ事業を行うことが出来ました。

(7) 会場との意見交換

(進行：佐藤 茂幸 副議長)

ここからは、会場の方からご質問やご意見を頂ければと思います。この会場には、チャレンジ事業にご協力頂いた方や連携させて頂いた方がいらっしゃるようです。そのことも含めてご意見やご感想を頂ければと思います。

それでは、まずは一緒にチャレンジ事業に取り組んで頂いた同じみらい協議会の委員である仁科美芳委員からご意見を頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

【大月みらい協議会 仁科 美芳 委員】

質問ではありませんがよろしいでしょうか。私はCグループに所属しております、一緒に取り組ませて頂きました。学童クラブというものを考えた時に、授業で行うことなく、放課後の子ども達の過ごし方ということで、その子ども達に、「校外での楽しい企画を味わわせたいね」というCグループの願いから立ち上がってきた取り組みです。

その中で、地域の方々が本当に惜しみなく、そして気持ちよく協力をして下さったことがとても有難いことでありました。そして、行政の方にも協力して頂きました。グループではものすごい回数の会議を行いました、時には夜10時くらいまで行うこともあったのですが、本当に熱心に一緒に加わって頂きました。そのようなこともとても有難かったなと思います。

そして、グループのメンバーは、この取り組みは絶対に継続していきたいと思っております、これから課題もたくさんありますが、地域の拠点、小さな拠点として、子ども達にはもちろんのこと、応援した大人も子どもを知る機会となったり、子どもの気持ちに寄り添う機会になったのかなと思っております。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。他に会場の皆さんからご意見、ご感想はいかがでしょう。…。いらっしゃらないようであれば、こちらからご指名させて頂きたいと思っております。大月仕事人として取材させて頂いた山崎さん、感想でも結構ですのでいかがでしょうか。

【大月仕事人 山崎 葉 氏】

Bグループの夢塾の1/2成人式について、現在は小学生で行っているとのことですが、この年齢を上げて、中学生とか高校生くらいにした方がいいのではないかなと思いました。

その理由としては、小学生の内は夢や将来の仕事については漠然としていているからです。しかしながら、実際にこのような仕事をしたいということになるにはもう少し年齢が上がってきてからであって、その時にサポートが必要だと思います。そこが気になりました。

【Bグループ：三木範之 委員】

その議論は当然ありました。その中でどうして小学生を対象にしたかというのと、1/2成人式で夢を単純に集められるということと、小さい時に、もし大きな夢が決まっている子どもがいたら、大きなインパクトを与えたいということがありました。高校生くらいになると方向性が決まってくる子が多いことから、もう少し年齢の下の子どもを対象にしたいと思っておりました。

そのような中、このくらいの事業ボリュームであれば自分も動けること、事業自体が限られた期間であること、夢をどこまで拾い上げることが出来るか分からなかったこと、子どもに強烈な印象を与えて夢を応援したいということから事業を計画しました。高校生く

らいになる夢がはっきりしてくるから、そこを具体的にサポートすることもいいのではないかという意見もありましたが、今回はテスト的な部分もあったので、小学生を対象に事業を計画しました。山崎さんのご意見のような部分は、当然段階的に細かくやっていけたら一番いいことだと思っておりました。

【佐藤 茂幸 副議長】

ありがとうございました。企画の段階でしたので、いろいろな選択肢があって、場合によっては高校生レベル、場合によっては大学生レベルまでやってほしいなと思ました。他のいかがでしょうか。・・・それでは、意見はないようなので、ここで意見交換会は終了と致します。

(8) まとめ

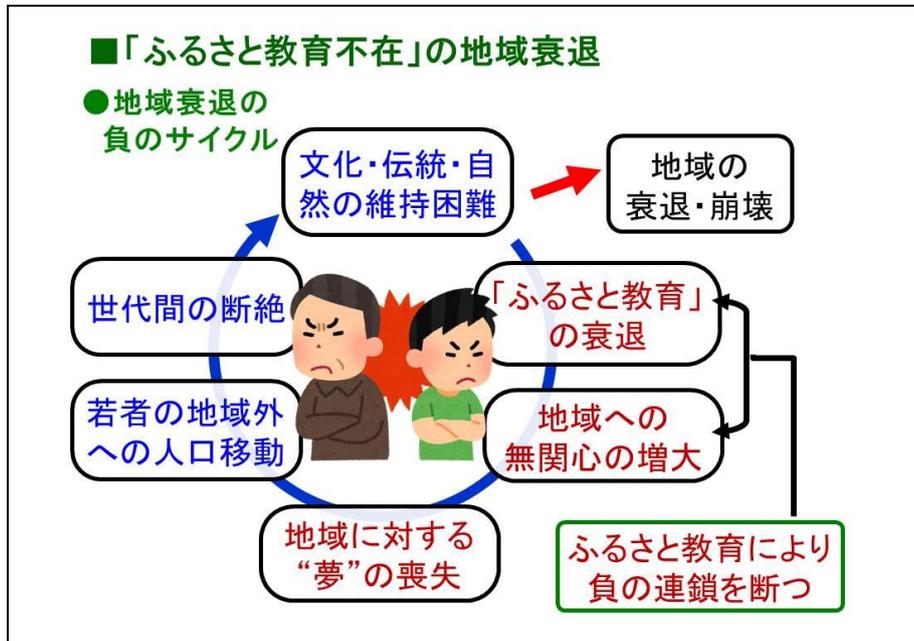
(発表者：佐藤 茂幸 副議長)

このチャレンジ事業は、あくまで今年度事業となっております。我々大月みらい協議会はここで任期の2年がここで終わるのですが、「来年度はどうするのか？」という部分でメンバーの入れ替えはあるかもしれませんが、継続してやっていこうと思っております。ここで、来年度の方向性について、最後の議論を始めているのですが、今日のパネルディスカッションを踏まえて、私なりに整理をさせて頂きました。まとめということで話をさせて頂き、この成果発表会を終了したいと思います。



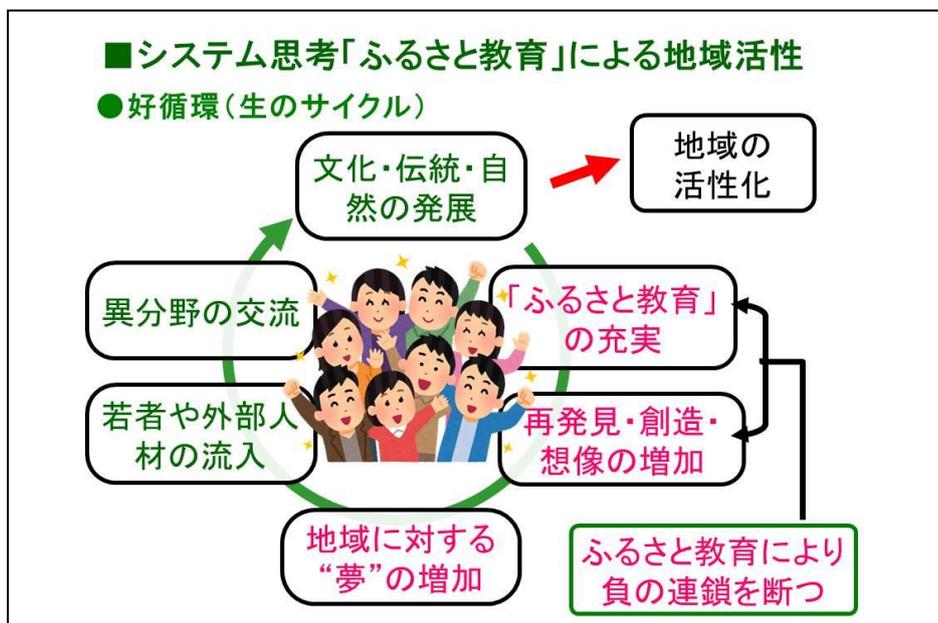
冒頭、志村議長が話をしましたが、大月みらい協議会の立ち位置は、「人口減少対策」です。人口減少に伴う地域の衰退に対して、何とか活性化させなければということが立ち位置となっています。今回は、「ふるさと教育」というお題を頂いて、何とか地域の活性化をしていきたいということです。

今、大月市にどのようなことが起きているかというと、ある種の「負のサイクル」が起きています。「ふるさと教育が衰退をしていく」と、これによって「地域の大人も子どもも無関心になっていく」、そうすると必然的に「地域に対する夢が持てなくなる」、「夢が喪失していく」、それによって、「若者が地域外に出て行ってしまふ、大月市に若者が入ってこない」、そして「世代間の断絶が起こる」、世代間の断絶が起これば、地域の魅力的な文化・伝統・自然というものを次の世代に継ぐことができなくなる、そうなるとおのずから「地域が衰退していく、崩壊していく」、結果的にこのようなことが失われていくので、「ふるさと教育がさらに衰退していく」という循環にあります。



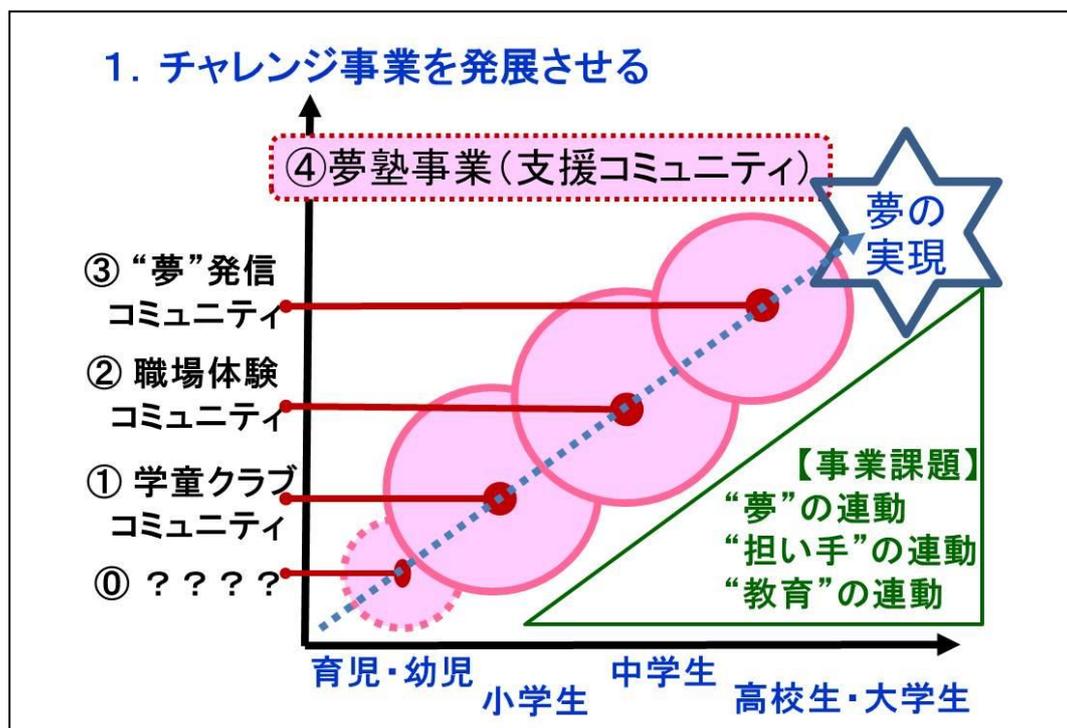
これを何とかしなければいけないということで、「ふるさと教育の衰退」にメスを入れていきましょうということが、今回我々大月みらい協議会に課せられたミッションであると考えます。それをチャレンジ事業としてやってきました。もちろんチャレンジ事業で、この「負のサイクル」をストップ出来るかは別の話で、まだまだハードルが高いかもしれませんが、これを何とか好循環のサイクルにもっていきたいと考えます。

好循環のサイクルとは、「ふるさと教育の充実」を図って、「大月市の魅力の再発見・場合によっては創造・想像を増加させる」、そうすると、「地域に対する夢が増える」、夢が増えていけば、「若者が外に出て行かない、逆に若者が入って来る、外部人材が流入してくる」、そうすると「異分野の交流」が起きて、「今ある文化・伝統・自然が発展」していき、さらに「新しいものが生まれていく」、そうすると「ふるさと教育がさらに充実」していく。この好循環を生み出さなければいけない。ただ、図にすると簡単ですが、中々難しい。でもチャレンジしていかなければならない。このような立ち位置にいます。その結果、私達はチャレンジ事業をやってきたわけであります。



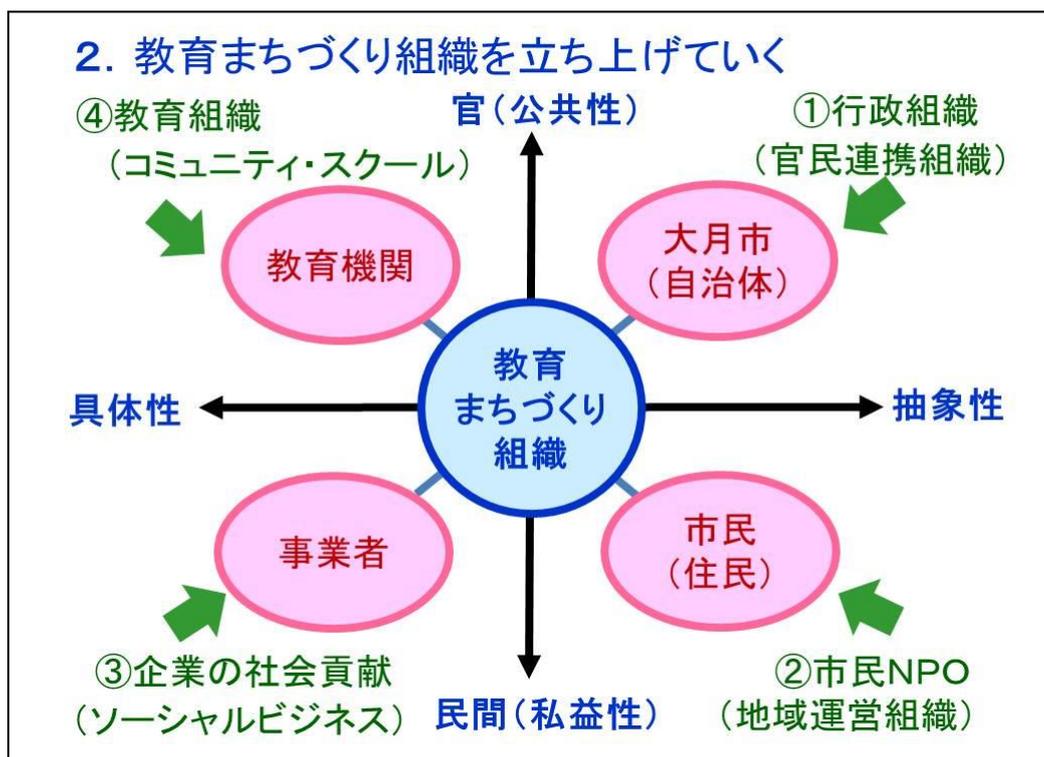
来年度（31年度）これを何とかしていきたいと思っておりますが、2つのことをやるべきかなと思っております。1つは、「チャレンジ事業そのものを発展させる」。チャレンジ事業の拡大、チャレンジ事業を連動させていく、場合によっては次のチャレンジ事業をやっていく。そして、もう1つとして、何よりも、このチャレンジ事業を持続可能な事業とするために、組織を作っていかなければいけません。先程、パネリストの方々から、「事務局が必要だ」という話がありました。「教育まちづくり組織」のようなものを、場合によっては立ち上げていくべきなのかなという感じが、我々大月みらい協議会の委員の中には意見として出始めています。この2つのテーマが来年のテーマかなと思います。

1つ目のテーマであるチャレンジ事業については、4名の方から事業を発表して頂きました。これを対象となる年代で揃えてみると、幼児・育児はいませんでしたが、小学生、中学生、高校生、大学生にそれぞれフィットする事業でした。でも、この事業は1つずつの「点」でしかありません。この点を何とか広げて、繋げていく必要があるかなと思っております。そうすることによって、夢の実現に繋がるのかなと思っております。この夢はもちろん子ども達の夢であったり、大人の夢にも繋がっていきます。「夢の連動」、「担い手の連動」、「教育の連動」ということになります。事業を拡大していくために、繋げていくことが次年度の課題であるかもしれません。



そして、2つ目のテーマである組織についても考えてみました。チャレンジ事業を実現するためのチームです。組織の在り方として図のようなものを考えました。「教育まちづくり組織」みたいなものが必要であると思いました。その立ち位置ですが、いろいろな人といろいろな機関を巻き込まなければいけません。それは、大月市という「自治体」であったり、我々「市民」であったり、場合によっては「企業、事業所」であったり、もちろん「教育機関」も欠かせないと思います。下図の真ん中にあるような組織を作っていかなければいけないと思います。これは中々難しいと思います。これを来年度、私達みらい協議会としてやるのかやらないのかということ、3月の最後の会議で議論して、これを市長さんに、あるいは市役所に提出したいと思っております。

組織の方向性としては、「自治体」の方から入っていくやり方がありますし、「市民」の方から入っていくやり方もあります。あるいは企業の方から入っていくやり方もあれば、教育機関から入っていくやり方もあります。いろいろなやり方があります。いろいろなやり方があるのですが、最終的には真ん中にあるような組織を作っていきたいと思っております。これには選択肢があるのですが、どれから入っていくのかということについては、まだ議論が詰められていません。



まとめになりますが、「チャレンジ事業をどのように発展させていくのか?」、「教育まちづくり組織のようなものを立ち上げていくのか?」という部分が私達の来年度の課題になっていくのかなと思っています。

今日は成果発表会をさせて頂いて、会場の皆さんからもご意見を頂きました。これを踏まえて来年度に繋げていきたいと思っております。以上をもちまして、「大月みらい協議会の取り組み成果発表」を終わらせて頂きます。ありがとうございました。

4. 講評（小泉教育長）

「教えるとは、夢を語ること」という言葉があります。今日の2時間の中で、一番多く出て来た言葉は「夢」だと思います。山梨県下で、「社会を明るくする運動作文コンクール」というものが行われたのですが、県下919点の作文の中から市内の小学校の6年生の女の子が、最優秀賞を受賞しました。この作文は、タイトルは「人とのつながりを大切にする社会に」というタイトルでした。地域の人々との様々なふれあいを通して、地域の人々の温かい人情や優しさにふれ、自分もそんな大人の仲間入りをしたいというという作文の内容でした。



「ふるさと教育」とは、この作文にあるように、また本日発表がありましたように、「人とのふれあいを通して学ぶこと」だと考えております。人とのふれあいを通して、誰が何をどのように学ぶのかということ、本日、大月みらい協議会の皆様が様々な切り口でアプローチをして下さいました。

Aグループでは、中学生のキャリア教育に焦点を当てて、職場体験学習の事前学習として「みらい夢カード」を作り、地域にある企業や事業所の皆様が「職業講話」で仕事の内容や仕事への情熱を語り、それを受けて実践的な職場体験学習を実施するという流れを作りました。子ども達にとって、とても貴重な体験になったと思います。働くことの意味や価値を考える貴重な学びになったと考えております。先程、小笠原様の発表にもありましたように、この取り組みは大人の側にとっても双方向性の学びになったのではないかと思います。子ども達にとっては地域の再発見になった学びだと感じました。

Bグループでは、小学校中学年の1/2成人式に焦点を当てて、子ども達が抱く夢を支援していこうという子どもにとっても、本市にとっても、とてもうれしい提起でした。10歳の子どもにとって、先程山崎様から話がありましたように、夢は仕事ばかりだけでなく、憧れであったり、したいことであったりします。学校をステージとして活動することには難しさがありましたが、「子ども達の夢を個別に支援していくことがあってもいいのではないのか？」という提起は大変貴重だと思いました。個性を伸ばすという支援は、全ての大人が持つべき大事な視点だと思います。「夢塾」の別バージョンを是非考えて頂ければと思います。

Cグループでは、学童クラブを舞台に、地域の方々と子ども達とのふれあいを作り出し、子ども達に「夢の種を持たせる」活動を展開されました。家族の絆をテーマにした本を読み聞かせたり、ものづくり、バードウォッチング、自然散策や収穫体験、座禅体験等々、たくさんの体験を作り出しました。これらの活動を通して、子ども達の中には、たくさんの数値化できない「見えない学力」が培われたと思います。Cグループで言うところの「夢

の種」でもあります。そして、これらの活動の底流に流れていたものは、「子ども達と地域の人々とのふれあい」でした。そこでは大変豊かな時間を共有することが出来たのではないかと思います。

Dグループでは、大月仕事人が登場し、自身の生き方や仕事への思いを発信して頂きました。都留高校生と大月短大生の若い世代が取材するという形で、若者へのメッセージ性が感じられました。子ども達にとって何よりの励みは、「素敵な大人に出会い、そのような大人になりたいという大人達に出会う」ことです。そんな素敵な出会いを作り出して頂きました。

本日、大月みらい協議会の皆様がたくさんの時間をかけて「ふるさと教育とは何か？」を考え、議論し、具体的な取り組みまで発展させて頂いた内容について発表して頂きましたが、あらためて感謝と敬意を申し上げます。

そして、今回の取り組みはたくさんの資産を与えて下さいました。「ふるさと教育とは誰が学ぶのか？何を学ぶのか？どのように学ぶのか？」ということに対して、「誰が」という学習の主体者は「子ども」であり「大人」でもあります。「何を学ぶのか」ということについては、「夢や希望を持つこと」を学びます。それが、子どもでもあり大人でもあります。「どのように学ぶのか」については、「人とのふれあいを通して学ぶ」ということを示して下さいました。

そして、ふるさと教育のキーワードは「夢」であり、この「夢」を核とした具体的な取り組みを示して下さいました。また、PDCAサイクルに乗せて検証まで行い、課題等の成果を明らかにし、今後に繋げていく上での礎を作して下さいました。

私自身、こんなに教育について考えて下さり、実際に取り組んで下さる方々が、大月市にこんなにいることに、大変誇りを感じたところでございます。また、発表の向こう側には、たくさんの時間と議論と試行錯誤があったことは容易に想像出来ます。本当にお疲れ様でした。

最後になりますが、冒頭の女の子の作文は、さらにこのように締めくくられています。「私はこのように、心温かい地域の人達がいるふるさとが大好きである。これから私が大人になった時、自分の子どもがふるさとに誇りを持てるように、自分に出来る事は率先して行っていきたい」。以上であります。ありがとうございました。